

終

電

能村 研三

対面句会の楽しみ

こつの要る抽斗ひとつ二月尽く
三月は四の五の云うてをられずに

終電てふ遠き記憶も朧かな
囀や構へてためす歙使ひ

箒目の流れのままに別れ霜
一盞に刻みて晒す走独活

橋の名の由来を聞きし花明り

朧の夜記憶の中のくねり道

掃き痩せの土に降りたる落花かな

高枝に粗ごしらへの巣組かな

コロナ禍による二度目の非常事態宣言が解除されたものの、第四波の感染拡大が心配されている。そんな中、「沖」では三月から正式な「オンライン句会」が始まった。A班、B班の二班体制で、それぞれ二十五名くらいの人が参加されている。二つの句会とも司会進行役の頼所友枝さんと栗原公子さんが手際よくさばいてくれるので、限られた時間でスムーズに進行している。九州、東北、富山、岐阜、愛知など遠方の人たちとも定期的に句会が開けることも大変有り難いことだ。

本誌でも、四月より「支部紙上指導句会」が始まった。これは従来、私が一年に一度は地方の支部へ伺って直接皆さんと触れあつて句会をしてきたものだが、それが思うように行き来が敵わないので、その代わりに始めたものである。

コロナ禍から一年を経て、句会の方法などいろいろ工夫をこらして対応して下さるスタッフの皆さんの努力には心より感謝申し上げたい。

三月には「沖」の同人総会と同人句会が開催された。会場の市川グランドホテルは新年句会で使うところ、いつも百五十人くらい入る部屋に四十名くらいで会合を行った。

四月からは中央例会、東京例会が対面の句会を再開することになった。中央例会には主に市川近隣の方の出席を得て二十数名の方々が集まり、欠席投句の参加は七十名近くの方からいただいた。

久しぶりに行われた対面の句会は句友の生の声が聞けるもので、その有難さをひしひしと実感した。もちろん句会の後の二次会も行わなかったものの、顔を合わせての句会のすばらしさに興奮を覚えた。

これからはオンライン句会、紙上句会と並行しながら無理のない程度で対面句会も再開していきたいと思う。

能村 研三